

連載

33 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (63歳・内科)

人と人の絆は
“寄せては返す波のよう”



もう10年も前のことです。平成16年の春に出会った患者さんは、今でも鮮明に記憶の中に残っています。

親しいヘルパーステーションの所長さんから在宅医療の依頼がありました。その方は76歳の男性。独居生活で食事があまりとれず、38.3℃の発熱があり、寝たきり状態の患者さんでした。もともとの病名は脊髄小脳変性症と前立腺癌です。それまではS高度機能病院が主治医でしたが、その日から病診連帯を開始することになりました。国策通り自宅での介護と医療の協力により、点滴静注補液と抗生剤投与をしばらく行ったところ、すっかりお元気になられたのです。

そして私はあることを思い出したのです。平成7年の夏、ヘルパーさんの知人である鉄工所社長夫

人から、困っている患者さんがいるとのことで、往診を頼まれました。その患者さんは、脱水傾向にあり風邪の症状に腰痛があるようでした。2ヵ月間ほど在宅医療を行いました。病状も安定し、またS高度機能病院の患者さんで通院介助により受診されていましたので、その後は訪問を中止しました。実はその時の患者さんが今回の患者さんだったのです。偶然とはいえ、何やら深い絆のようなものを感じずにはいられませんでした。この再会から平成24年の看取りまでの間、一生懸命お世話させていただいたのです。

その間、空気の通りが悪いせいで壊れかけていた床の全面改修工事をし、冷暖房設備が石油ストーブと扇風機で火事や熱中症になる危険があったため、それらすべてボランティアでエアコンを設置

しました。その後、癌性肋膜炎、排泄障害、心(呼吸)不全で酸素療法となりましたが、本人の希望通り最期まで自宅での生活を続けることができました。

一口に365日24時間患者さん中心の介護医療の十分な提供とはいっても、大変な努力が必要です。しかしながら、この業務に携わるスタッフにとって、人の命の尊さに触れ、そして人間性を磨くことができ、この上ないやりがいを感じるものなのです。

私たち「命」と向き合う業務は、どうしても「思想・哲学・宗教・生命科学」と深く関わってきます。そして在宅業務は、書物からの知識では得られない感動を私たちに与え、良き方向へと導いてくれるようにも感じます。まるで東洋思想“陽明学”の知行合一が天に通じる智慧として授かっていくようでもあります。

「お医者さんが来てくれる」
質の高い在宅医療・看護・介護
を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>